

主な発言		
増田委員	1	・ 桃花台 NT と既存集落と産業の3つのコミュニティの連携・融合 が重要である。
	2	・ 空き家の活用・流通については、従来までの都心通勤者をターゲットとする形も必要であるが、 地域貢献型の新しい居住者像をターゲット としていくことも必要である。桃花台 NT あるいは東部地域に居住しながら「住む」と「働く」という行為を同一型で展開していくという新たな需要層をどう捕まえていくか。衰えてくる 地域コミュニティのサポートをすることが居住魅力 につながると、一体化が生まれてくる。このようなことを意識したまちづくりが必要である。
	3	・ 何も新しい居住魅力をどう生み出そうかという議論ではなくて、むしろ 今ある生活課題を新しい居住魅力として創出することで課題解決する視点 が重要である。
	4	・ これまで、 行政サービスを受けるといった「ゲスト」の立場から、市民や住民が、市民や住民に公的サービスを提供するといった「ホスト」としての立場への転換 が重要である。自らや自らの団体の楽しみだけでなく、他の人や他の団体の人々が喜んでいる姿に、喜びややりがいを見出すといった視点がまちづくりでは必要とされる。
古池委員	5	・ 小牧市のイメージは内陸型の工業都市で、歴史としては小牧山であるが、小牧市史には「1960年代に入っても、篠岡には日本の“ふるさと”のたたずまいがそのまま残されていたのである。」とあり、このまま残っていたら 貴重な「小牧の奥座敷」的な価値 がそこにあり、これは時代が再評価していくと、今まで近代都市でやってきた内陸型の工業都市ではない価値がある。これを どうやって桃花台 NT と連携・融合していくか が最大のポイントだと考える。
	6	・ 3つのコミュニティのどことどこをどのように既存資源をシェアしながら仕組みを構築し、行政としてどのようにサポートしていくかを考える必要がある。

主な発言		
大塚委員	7	・企業誘致をして働く場を確保するのは20世紀型のものであり、現実的ではなく持続可能という観点からは疑問符がつく。今後は 企業誘致から起業支援に転換していく 必要がある。小牧市の東部地域は色々な資源があるので、うまく活用すれば転換できると思う。
	8	・イメージ戦略が重要であり、新しいライフスタイルを提案するような、これから21世紀の若者が自己実現できる場所がそこに用意されているところということ売り出すような 長期的なビジョン と、高齢化への対応の 短期ビジョンの双方を一緒に考えて いく必要がある。
和田委員	9	・ 起業、研究へのチャレンジ 、副業でもできる簡易的なチャレンジできる 仕組みの構築 が必要である。
	10	・東部地域で何ができるか、どんなまちであるかなど、まちのイメージをわかりやすく、端的に 市内外にブランディングしていく ことが重要である。
坪井委員	11	・東部地域が面積のわりに工業の集積度が少ないので、住宅等の問題もあるが、 企業誘致など産業振興も 考えていく必要がある。
	12	・ ハイウェイオアシス、スマートIC の建設が進められており、そこで 篠岡地区の特産品等 を売ることで 東部地域の活性化 されると思う。
尾関委員	13	・他自治体では 実証実験のフィールド として選定され、新たな産業の誘致等も進めている。そういったところに 手を挙げる ことによって、 既存の企業が成長産業に加入する意識も高まる 。また、国内であれ、海外であれ、アナウンスメント効果によって、算入するという効果も見込まれる。是非 東部地区で新しいコンセプトに基づいて、産業を振興 して欲しいと思う。
	14	・若い人と生業の2つがキーワードであり、 産業振興がなければ、若い人が戻りたくても戻れない という現実があると思う。

主な発言		
小柳委員	15	・ 桃花台 NT は昭和 55 年・56 年頃から同世代の人達が一斉に入居を開始し、現在では 高齢化の進展が速い地域 である。今の住民の年齢等を考えると 5 年先のことを真剣に考える必要がある と思う。
	16	・ 私たちが桃花台 NT に入居したころは、こども達があふれており、公園に草も生えない状況であったが、今は、 当時こどもだった人 が高校・大学・就職で桃花台を出て、そのまま外部で世帯を持ち、 帰ってくるのが少ない状況 となってしまうている。
山下本部長	17	・ 新しい価値の中で新しい若い人たちに集まってもらえるような再生ができるか。「 戻ってきたいと思われるまち 」と「 新たに來たいと思われるまち 」の両面で考えていく必要がある。
	18	・ 転入者や勤労者など東部地域へ 新たに関係する人たちを受け入れる文化的なコミュニティを育成すること が必要である。